《書評》

田中昌人著『発達研究への志』

（あいゆうぴい発行，萌文社発売，1996年刊，200頁）

西　川　由紀子

本書は田中昌人先生の京都大学教育学部における最終講義と，同じく京都大学教育学部に提出された卒業論文によって構成されている。つまり，これは田中先生の1996年時点における研究の到達点と，その研究の出発点とを示したものである。卒業論文が書かれたのは1953年度であり，最終講義が行われたのが1995年３月であるから，この二つの論文の間には41年の歳月が流れている。にもかかわらず，この本が企画されたのは，その卒業論文が田中先生の現在の研究を理解することに役立つからであろう。最終講義の中で田中先生は「教育が本来の教育であってほしいと願うならば，それが反対物に転化させられることについての科学的な解明を行って，反対物に転化させられないようにするための研究が必要である」という，私たちが授業のなかで何度も何度も聞かせられた田中先生の研究を理解する上で必須の命題が，研究の出発点である卒業論文における研究の成果であったことを紹介された。そうした意味で田中先生の研究への姿勢を方向付けたのが卒業論文であったに違いない。学生時代から一貫して「こだわり」を持って研究を続けてこられた田中先生らしさが，本書の構成に現れていると思う。

第１部として掲載されている最終講義は，「『可逆操作の高次化における階層－段階理論』の形成過程と今後の研究課題」と題され，これまでの研究のあゆみがまとめられている。はじめに研究の出発点として第２部に掲載されている卒業論文や，1965年より13年間おられた精神薄弱児施設近江学園での研究が紹介されている。

続いて1960年代半ばより形成された「可逆操作の高次化における階層－段階理論」が紹介される。「『可逆操作』とは“外界を取り入れ，新しい活動を作り出し，そうすることで自らの内面性を豊かにしていく基本操作”である」といった定義を始め，「静かな法則性」「ダイナミックな法則性」の解説がなされている。「階層－段階理論」を理解する上で欠かせない用語が，コンパクトに解説されているこの論文を読みながら，田中先生の特論を聴いた直後の教育指導講座の院生の部屋で，ある先輩が「田中先生の『用語集』」を作ろう」と発案され，一同乗り気になったものの『用語集』を使いたい人は多いものの，書ける人はなく実現しなかったというエピソードが思い出された。この最終講義はまさにその『用語集』の役割を果たしてくれるものである。

次に紹介されているのが「発達」の概念の歴史的検討である。日本における“development”の訳の変遷をたどることによって，国際的に通用している“development”の概念と，「開発」と「発達」が対立概念とされかねない特殊日本的な「発達」の概念のくいちがいがどこで生まれてきたかを明らかにしている。「開発の目的は人々の発達保障にある」という国際的な「発達」概念が採用されていた戦後1940年代の法律には，「民主」と「健全」と「発達」が一体となって法の目的を達成することが明示されていた。例としてあげられているのは「公職選挙法」「農業協同組合法」「教育基本法」など様々な分野の法令である。この“development”を個人の発達と，集団の発展と，社会の進歩の3つの系においてとらえる歴史的検討は1980年代後半より行われた研究の成果であるが，3つの系それぞれにおいて民主主義を実現していくことの重要性は1970年代前半に指摘されていたものであり，ここにも田中先生の研究の継続性が現れている。

最後にあげられたのが，「美しき法則性」の解明にむけての研究である。これは現在進められている研究の紹介である。この「対称性原理」によって説明される法則性は，理論として理解することはかなり難解であるが，具体的な子どもの姿の記述を見るとそのきわめて細かい視点を持つことの有効性が感じられる。いかにして子どもの変化をとらえるかという課題は，とりわけ発達に障害を持つ場合大きな問題となる。ひとつの行動ができるかできないかという2分的なとらえ方をするのではなく，ここに示されるように視線がどこに向いているのかといった細かな観察をすることによって，ひとりひとりのうちに培われた以前とは異なる能力をとらえることが大切なのである。これはビデオ画像による分析が可能になった今日ならではの研究成果であろう。最後に壮大な今後の研究課題を示されており，その意欲の高さに圧倒された。

第2部は卒業論文「新胎教の可能性と展開上の諸問題－Schwangerschafts-toxikose の出生児に及ぼす影響調査－」である。1章から3章にかけては，胎教の変遷を『魏志倭人伝』にまでさかのぼってとらえ，胎教が永年にわたって人々の強い関心事であるにもかかわらず根本的な検討がなされていない問題を指摘している。そのうえで，胎教の教育学的基礎を，妊娠中毒症母胎産児の予後の調査研究によって検討している。歴史的検討を基盤に，心理学的調査研究を行ったこの卒業研究は，当時の教育学部が部門に分かれずトータルな教育を行っていたことと，それに応える希有の壮大な発想を我がものとする田中先生の個性が共鳴した結果と思われる。

本書のタイトルは『発達研究への志』である。田中先生の研究は，一部を切り出して吟味するのではなく，その中核を押さえ，トータルにとらえることでこそ『志』を理解できるものであることが感じられる一冊であった。

（華頂短期大学）